

# 小波瀾

ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫



ニコライ・イーリイチ・ベリヤーエフというのはペテルブルグの家作持ちで、競馬気  
 違いで、そして栄養のいいてらてらした顔の、年の頃三十二ぐらいの若紳士であった。そ  
 の彼がある晩のこと、オリガ・イワーノヴナ・イルニナ夫人に逢いに行った。この女は彼  
 と同棲どうせいしていた、或いは彼自身の表現を借りれば、彼は彼女と退屈な長つたらしいロマ  
 ンスをひきずつていたのであった。実際、このロマンスのはなはだ興味がすうこうあり崇高で  
 らあつた書き出しの幾ページかは、とつくの昔に読まれてしまったので、今ではなんの珍  
 しいことも面白いこともないページが、だらだらと続いているだけであつた。

あいにくオリガ・イワーノヴナは留守だったので、私たちの主人公は客間の寝椅子ねいすに寝  
 そべつて、彼女の帰宅を待ち受けることになつた。

「今晚は、ニコライ・イーリイチ！」と男の児この声がした、「ママはじきに帰つて来ま  
 すよ。今ソーニヤと一緒に仕立て屋さんへ行つたの。」

同じ客間の長椅子の上にオリガ・イワーノヴナの息子でアリョーシャという八つになる  
 児が寝ころがっていた。彼はなかなか綺麗な男の児で、ピロードのジャケットを着て黒の長  
 靴下はを穿いた姿は、まるで絵でも見るようだった。彼は縹しゆす子のクツシヨンの上に寝て、最

近にサーカスを見物したとき眼をつけた軽業師の真似まねをしているらしく、片脚をかわりばんこに上へ蹴り上げていた。やがて上品に出来あがった脚がくたびれてしまうと、こんどは両手を使い出して、猛烈に飛び上がってみたり、四つん這ばいになって逆立ちの稽古をやり始めた。そんなことをやっている彼の顔つきはとても真剣で、苦しそうに息をはずませたりして、まるで神様がこんなにいっときもじつとしていられない身体をお授けになったことを怨うらんでいるように見えた。

「やあ、今晚は、先生」とベリヤーエフは言った、「君だったのか。ちつとも気がつかなかったなあ。お母さんは丈夫かい？」

アリヨーシヤは右手で左足の踵かかとをつまみ、頗すこぶる不自然な姿勢になったかと思うとくると引っくり返り、途端に飛びあがって房の一ぱいついた大きなランプの笠かさの蔭からベリヤーエフの顔を覗のぞきこんだ。

「さあ何て言うのかなあ？」と少年はちよつと肩を揺すつて答えた、「本当を言うと僕のママはいつだつて丈夫じゃないんですよ。ママは女でしょう、ところが女つてもものは、ニコライ・イーリイチ、しよつちゅうどこかしら痛いですよ。」

ベリヤーエフは手持ち無沙汰ぶさただったので、アリヨーシヤの顔を眺めはじめた。彼はオリ

ガ・イワーノヴナと今のような関係になつてから、まだ一度もこの男の児に注意を向けたこともなく、全くその存在を無視していた。男の児は彼の眼の前にいつも姿を見せた。けれど彼は、なぜこの児がいるのか、どんな役目をしているのか、そんなことは考えてみようとも思わなかつた。

夕暮れの薄ら明かりに浮かびあがっているアリョーシヤの、蒼白あおしろい額ひたいと瞬まばたきをしない黒い眼を持った顔は、不意にベリヤーエフに、ロマンスの最初の頃のオリガ・イワーノヴナを思い出させた。そこで彼は、その児をかわいがつてやろうという気になつた。

「さあ先生、ここへお出いで」と彼は言った、「ひとつ小父おじさんにもっと近い所で顔を見せておくれ。」

少年は長椅子から一足飛びに跳とび下りて、ベリヤーエフの方へ駈かけ寄つた。

「そこで」と、少年の瘡やせた肩に手を掛けて、ニコライ・イーリイチは始めた、「どうだね、元気かい？」

「さあ何て言うのかなあ？ 前の方がもっとよかつたなあ。」

「ふむ、どうして？」

「わけは簡単なんですよ。前にはソーニヤと一緒に唱歌と読み方をやってればよかつたん

でしよう？　ところがこんどはフランス語の詩を暗誦するんですもの。小父さんこの頃お髯を刈ったんでしよう？」

「ああ、この間さ。」

「そうだと思つたんだ。お髯がちやあんと短くなつてますもの。ちよつと触らせてみせてよ。……こうやつて痛かない？」

「いいや、痛くなんかないさ。」

「なぜ一本きり引つ張ると痛くつて、沢山いっぺんに引つ張るとちつとも痛くないの？　ふうん。——でも小父さんは頬髯がないからおかしいなあ。ここんところから剃つちまつて、それから横つちよのここんところは残しとくんですよ。……」

少年はベリヤーエフの頸つ玉に巻きついて来て、彼の時計の鎖をいじりはじめた。

「僕は中学生になつたら」と彼は言った、「ママに時計を買つて貰うの。僕もこんな鎖にして貰おうや。……やあ、素敵なメダルだなあ！　パパのもちようど同じようなんだけど、小父さんのはほらここんとここに糸があるでしょう？　パパのは字がはいってるの。……まん中んところにはママの写真が入れたるんですよ。パパの今の鎖は違うんですよ。環のじゃなくつて、リボンなの。……」

「どうして知ってるの？ 君パパに会ったの？」

「僕？ ううん、……違うの。僕……」

アリヨーシヤは紅あかくなつた。嘘うそを見つけられたのですっかり困つてしまつて、メダルを爪で一生懸命に引つ掻きはじめた。ベリヤーエフはじつと少年の顔を見詰めていたが、やがて訊たずねた。

「パパに会うんだろう？」

「ううん、……違うの。……」

「いけない、本当のことをお言い、嘘をついちやいけないよ。……君の顔にちやんと嘘ですつて書いてあるのさ。一ぺん言い出したんだから、もうごまかしても駄目なんだよ。さ、言つて御覽、会うんだろう？ さ、小父さんと仲好なかよしになろう。」

アリヨーシヤはもじもじしていた。

「でも小父さん、ママに言わない？」と少年が訊きいた。

「そんなことないさ。」

「ほんとに？」

「ああ、ほんとさ。」

「小父さん、誓うの？」

「やれやれ、困った坊ちゃんだね。この小父さんを何だと思ってるの？」

アリヨージャはあたりを見廻みまわした。それから眼をととても大きくして、彼の耳にささやいた。

「ただお願いですからママに言わないでね。……誰にも言わないでね、秘密なんだから。もしこれがママに知れたら、僕もソーニヤもペラゲーヤも酷ひどい目に逢あわされるんだから。……じゃ、僕言いますよ。僕とソーニヤは毎週火曜と金曜にパパに会うんです。夕飯の前にペラゲーヤが僕たちを散歩に連れて出ると、僕たちはアプフェル喫茶店へ行くんです。するともうパパがそこで待ってるの。……パパはいつも仕切りのついた部屋に坐ってるの。あすこには大理石の素敵なテーブルや、背中のない鶯がちょう鳥の恰好かつこうをした灰皿があるんですよ。……」

「それから何をするの？」

「何もしないの。はじめに今日こんにちはを言いって、それからみんなでテーブルの廻りに坐ると、パパは僕たちにコーヒーやパイを御馳走ごちそうしてくれるの。ソーニヤは肉のはいったパイを食べるでしょう。けど僕は肉のはいったのは大嫌いな。僕はキャベツや卵のが好きなんで

す。僕たちうんと食べちまうものだから、後で夕御飯のときママに見つからないように、一生懸命たくさん食べるんです。」

「それから何の話をするの？」

「パパと？ 色んなことを話すの。パパは僕たちをキッスして、抱きしめて、色んなとても滑稽な話をしてくれるの。それからこうも言うの、お前たちが大きくなったら引き取ってやるぞ、って。ソーニヤは厭<sup>いや</sup>だ<sup>だ</sup>って言うけど、僕は賛成なの。そりやママがいないと淋<sup>さび</sup>しいけど、僕その代り手紙を書きますよ。それよりか、お休みの日にママの家へお客様に行ってもいいじゃない？——ね、そうでしょう？ パパは僕に馬を買ってやるって言うの。パパってとてもいい人ですよ。なぜママが別々に住んで、逢<sup>あ</sup>ってはいけない<sup>い</sup>って言うのか僕<sup>わか</sup>解<sup>か</sup>らないなあ。パパはとてもママが好きなんですよ。会うたんびに、ママは丈夫かい、何をしてるね、って訊<sup>き</sup>くんですもの。ママが病<sup>い</sup>気<sup>き</sup>だ<sup>だ</sup>って言う<sup>う</sup>と、パパはこうこんなにして両手で頭を抱えて……それから、そこらじゅう歩き廻<sup>ま</sup>るんです。いつでも僕たちに、ママの言うことをきくんだぞ、大事にするんだぞって頼<sup>たの</sup>むの。ねえ、小父<sup>ちち</sup>さん、僕たち不幸せなんでしょう？」

「ふむ……なぜそう思うの？」

「パパがそう言うの。お前たちは不幸せな子供だなあ、って言うの。それを聞くと僕ぞつとするんです。お前たちも不幸せだ、俺も不幸せだ、ママも不幸せだ、って言うの。それから、さあ神様にお前たちのこともママのこともよくお願いおし、って。」

アリヨーシヤは鳥の剥製はくせいをじつと見詰めて、そのまま考えこんでしまった。

「そうか……」とベリヤーエフはつぶやいた、「そうか、そんな風にやっていたんだね。喫茶店で会議をやっていたのか。で、ママは知らないの？」

「そりや、知りやしません。……どうして分かるもんですか。ペラゲーヤはどうしたって言いつこはないし。一昨日おとといパパは梨なしを御馳走してくれましたよ。とても甘くって、ジャムみたいの！ 僕二つも食べちゃった。」

「ふむ、……で、何かね、……ねえ、パパはこの小父さんのことは何にも言わないの？」

「小父さんのこと？ さあ何て言ったらいいのかなあ。」

アリヨーシヤは探るような眼つきでベリヤーエフの顔をちらと見て、ちよつと肩を揺すつた。

「何にも変わったことなんか言やしませんよ。」

「じゃ例えば、どう言うの？」

「悪口は言わないの。だけど、つまり……小父さんのことを憤おこってるの。ママが不幸せになつたのは小父さんのお蔭だつて言うの。それから、小父さんが……ママを駄目にした、つて。ねえ、パパつて変な人じゃない？ 小父さんはいい人で、一度だつてママを叱しかつたことなんか無い、つて僕言つてやるんだけど、パパは頭ばかり振つているんですもの。」

「すると、この小父さんがママを駄目にしたつて言うんだね？」

「そうなの。憤らないでね、ニコライ・イーリイツチ。」

ベリヤーエフは起たちあがつた。暫しばらくじつと立つていたが、やがて部屋の中を歩き廻りはじめた。

「こりや全く奇妙な話だ……おかしな話だ」と彼は肩を揺すり皮肉な笑いを浮かべながら呟つぶやくように言つた、

「自分がぴんからきりまで悪いくせに、この俺が駄目にしただつて？ 大した無垢むくの子羊があつたもんだ！ じゃ、つまり、この俺がお母さんを駄目にした、つてそうお前に言うんだね？」

「そうなの、けど……ねえ、小父さん憤らないつて言つたじゃありませんか？」

「俺は憤りはしないさ。……それに、とに角お前の知つたことじゃない。いやはや、……」

まるでこれは大笑いだ。この俺はまるで、鶏が味噌汁の中に跳びこんだような態だ。おまけに罪は俺にあるんだそうさ。」

ベルの鳴るのが聞こえた。少年は席を飛び立ったかと思うと、駈け出して出て行ってしまった。一分間ののち、一人の婦人が小さな女の児を連れて客間にはいつて来た。これがアリョーシャの母親のオリガ・イワーノヴナであった。アリョーシャも彼等の後から、両手を振って大声に歌をうたいながら、ぴよんぴよん跳ねてついて来た。ベリヤーエフはちよつとわずいたまま、また部屋を行ったり来たりしつづけた。

「そりや勿論、文句の持つて行きどころはこの俺より外にはないからな」と彼は鼻をくんくん言わせながら呟いた、「あの男の言うのは本當さ。あの男はなるほど侮辱を受けた亭主にはちがいないさ。」

「それ、何のお話なの？」とオリガ・イワーノヴナは訊ねた。

「何の話だつて？ まあ、おきき。おまえの御亭主がとんでもない話をふれ歩いてるんだよ。この俺は大変な恥知らずの悪漢にされちまったのさ。この俺がおまえや子供たちを駄目にしたんだとき。おまえたちはみんな不幸せで、俺だけが恐ろしく幸福なんだ。恐ろしく、まるで幸福なんだ！」

「私には何のことやら分かりませんわ、ニコライ。いったい何のですの？」

「じゃ、あの小つぼけな紳士に訊いて御覧」とベリヤーエフはアリオシヤを指さして言った。

アリオシヤは真紅まつかな顔になった。それから急に蒼あおざめて行つた。顔じゆうが恐怖のために歪ゆがんでいた。

「ニコライ・イーリイチ」と彼は鋭くささやいた、「シツ。」

オリガ・イワーノヴナは呆あきれ顔がでアリオシヤを眺め、ベリヤーエフを眺め、それからまたアリオシヤを見た。

「訊いて御覧つたら！」とベリヤーエフはつづけた、「おまえの所のペラゲーヤは大変な引きずり女だぞ。子供たちを喫茶店へ引つ張つて行つて、パパさんに面会させるんだ。だがそのことじゃない。問題は、パパさんが受難者で、この俺が悪者でならず者で、おまえたち二人の生活を滅茶滅茶めっちゃめっちゃにしちまつたんだ。……」

「ニコライ・イーリイチ！」とアリオシヤは呻うめいた、「約束したじゃないの！」

「ええ、黙つてろ！」とベリヤーエフは手を打ち振つた、「これは約束なんぞより大事なことなんだ。俺は偽善は我慢できん、嘘は。」

「ちつとも分かりませんわ」とオリガ・イワーノヴナは言った。その眼に涙がきらきらした。「ねえ、リヨーニカ」と彼女は眸を息子の方へ向けて、「お前はお父さんにお会いなの？」

アリョーシヤには母親の声は聞こえなかった。彼は恐ろしそうな顔でベリヤーエフを見詰めていた。

「そんなことがあるのですか！」と母親は言った、「ペラゲーヤに訊いてみましょう。」  
オリガ・イワーノヴナは部屋を出て行った。

「ねえ、小父さんは約束したじゃないの！」とアリョーシヤは身体じゆうを顫ふるわしながら言った。

ベリヤーエフは少年に手を振って、やはり歩き廻っていた。彼は自分の受けた恥辱のこ  
とばかりに心を奪われていたので、また元通りに少年の存在を忘れていた。この大きな真  
面目な男は子供のことなんぞ構ってはいられなかったのであった。

アリョーシヤは部屋の隅の方に坐って、いかにも恐ろしくて堪たまらない様子で、自分が瞞だま  
された次第をソーニヤに物語っていた。彼はぶるぶると身顫ふるいがとまらないで、吃どもつたり  
泣いたりした。こんな粗あら々しい仕方あつで嘘と顔を突き合わせたのは生まれてはじめてであ

った。甘い梨や、パイや、高い時計やのほかにも、この世の中にはまだ別の色々な事のあることを、彼はこれまで知らずにいたのであった。したがってそれに附ける名が子供の言葉にはないのであった。

(Житейская мелочь, 1886)



# 青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第五卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小波瀾

ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>